

マスターズを彩るレジェンドたち(3)

新型コロナウイルスは相変わらず居座っている。いつまで続くのか。7月からは陸上界もそれぞれの動きを見せ始めているが、マスターズ陸上は静かなままだ。1日も早くトラックで、フィールドで体をいっぱい動かしたい、の思いだろう。毎号、過去を彩ったレジェンドたちの活躍ぶりを紹介しているが、今月号もその続編を。本格的な夏、マスターズ会員のみなさん、熱中症にご注意!

写真提供/日本マスターズ連合

ミスター・マスターズ 森田真積さん(茨城)

日本マスターズ連合が2011年3月に創設した『マスターズ陸上殿堂』に5人の初代殿堂入りがあり、(競技者表彰)として森田真積さんの名前も。森田さんは1913(大正2)年7月17日生まれで、すでに亡くなられている。

森田さんは、クラス別の世界記録をリレーを除き9回樹立。同日本記録を別表の通り(ベスト記録のみ記載)出したほか、金メダルを、マスターズの世界選手権で25個、アジア選手権で9個、全日本選手権で58個獲得した実力が評価された。金メダルの生涯獲得数は92個にのぼる。

森田さんは93歳のときに、日本スポーツグランプリの第1回受賞者(2006年)となっている。

全日本マスターズ選手権には茨城所属で第1回大会から出場。当時は65~69歳はM65でなく、3Bとしていた。森田さんは3B・100m14秒5、走幅跳4m61(-0.4)で2種目に1位、三段跳9m12(+0.2)の2位となり、優秀選手の1人に選ばれた。

最初に男子最優秀選手賞を獲得した第4回大会では、M70・走高跳1m30の日本タイ、走幅跳4m70(±0.0)の世界新、三段跳9m87(+0.3)とこちらも世界新で3種目を制覇した。1983年、長崎での大会だった。

2度目の男子MVPは第9回の秋田大会だ。1988年の7月、夏場だった。前回の長崎は10月の秋の舞台であった。夏の羽後路開催は東京以北では初

めのイベントだったが、森田さんが走幅跳と三段跳の2種目で世界新を出し、会場に彩りを添えた。

75歳の森田さんはM75・走幅跳で4m78、三段跳で10m05と、4m28、9m52の世界記録を書き替えたのだ。実は棒高跳も2m70を跳び「世界記録の2m46を更新」とされたが、後に“幻の世界新”に。なぜなら、世界記録一覧表には2m46、2m90などの記載があったからだ。

2m90を跳んだとされたのは1987年2月7日にC・ジョンストン(カナダ)。これを聞いた森田さんは「彼の實力は大したもの。73歳のときに3m05を跳んでいるのを知っているし、2m90は正しいと思います。私の2m70より力は上です。彼の2m90が世界記録で間違いないでしょう」と、いかにも“ミスター・マスターズ”らしい言葉を口にした。

記録について意に介しなかった森田さんは、世界マスターズにも第3回大会(1979年)から第14回大会(2001年)まで参加している。先述の通り世界大会での金メダルは25個。すごいのは走幅跳と三段跳だ。M65クラスから参加し、M85クラスまでに各種目で8個ずつの金メダルを獲得している。

特にM80クラスで出場した第10回宮崎大会では80mH、4×100mR(1走)、走高跳、棒高跳、三段跳の5種目を制する活躍ぶりだった。

同宮崎大会の開催期間中に『競い合う 技に年輪 心に若さ』をテーマにした国際シンポジウムがあり、NHK解説主幹・西田善夫氏が司会で6人の

パネリストが参加した。80歳の森田さんも壇上の人として語った。

「大正時代の小学生の頃に、戦前にあった神宮大会で近所の知っている人が棒高跳で活躍したことに刺激を受け、裏山から竹を切ってきて、庭を掘り返して棒高跳のまね事をしたのがきっかけ。だから陸上を70年くらいやっている。宮崎大会でも棒高跳で優勝できたし、80mH16秒98、三段跳8m95はM80クラスの世界新だった」

「若いときに軍隊に行き、戦争で弾が当たり2度負傷して1年半ほど入院した以外、病気をしたことがないので、病気の知識はない。体が丈夫なら黙っていても何かやりたくなるもの。その人が何をやるかはその人次第。健康なら自然と体を使うようになるし、健康

●森田真積さんがマークした クラス別世界・日本記録

クラス	種目	記録
M65	100m	13秒9 (68歳・1981年)
	走高跳	1m26 (67歳・1980年)
	棒高跳	2m70 (68歳・1981年)
	走幅跳	5m04 (69歳・1982年)
	三段跳	10m28 (69歳・1982年)
M70	100m	13秒67 (70歳・1983年)
	80mH	14秒88 (72歳・1985年)
	走高跳	1m33 (72歳・1985年)
	棒高跳	2m80 (72歳・1985年)
	走幅跳	※4m96 (70歳・1983年)
M75	三段跳	※10m25 (72歳・1985年)
	棒高跳	2m70 (75歳・1988年)
	走高跳	※4m78 (75歳・1988年)
	三段跳	※10m05 (75歳・1988年)
	80mH	※16秒98 (80歳・1993年)
M80	棒高跳	2m30 (80歳・1993年)
	走幅跳	※4m19 (81歳・1995年)
	三段跳	※8m95 (80歳・1993年)
	棒高跳	1m80 (86歳・1999年)
	M85	走幅跳
三段跳		※7m91 (85歳・1998年)
M80・4×100mR		※1分05秒75 (1995年)
M85	(森田、岡崎 正巳、立石 祐一、須田 義一)	

※は世界記録、以上公認記録だが100m、80mH、走幅跳、三段跳の風速を省く

でなければ何をしようという活力も出てこない」

「私たちの年齢になると“健康の競争”をやっており、勝ち負けは健康で決まる。でもトレーニングでつぶれる人もいます。自分の限度を知ることが大切だ、と思う（無理はしない）」

マスターズはスポーツを通じて高齢者に最高の国際交流の場を提供してきた。陸上を楽しむためには健康を。故障しないトレーニングが大切という森田さんは東大出身のレジェンドだった。

投てきの女王

嘉成俱子さん(79歳・兵庫)

南半球のオーストラリア・バースで2016年10月から11月にかけて行われた第22回世界マスターズ。嘉成俱子さん(当時・福島、現・兵庫)は、投てき種目を中心に8種目に出場し、7つのメダルをゲットした。あまりの活躍ぶりに、日本選手団の団長を務めた鴻池清司日本マスターズ連合会長から『日本選手団長賞』に選出。初めてのことだった。

この年の春、夫の満さんを病気で亡くし「主人の分まで」と頑張って試合に挑んだのだ。満さんが元気なときは、いつも“二人三脚”でマスターズの試合に出ていた。満さんが亡くなって、気落ちしていた俱子さんだったが「いつまでもこのままでは、夫も浮かばれない」と気を取り直して、マスターズ陸上に再び情熱を注いだ。

バースでの嘉成さんの成績は、W75・砲丸投10m43、円盤投24m51のいずれも日本新V。ハンマー投27m80で2位、やり投17m28の3位。投てき五種4380で1位、重量投10m73の2位。この投てき五種と重量投は日本新である。リレーにも出て4×100mR(2走)が4位、4×400mR(3走)は3位で表彰台へ。

日本選手団長賞を渡した鴻池会長は「8種目に出るだけで大変なのに、メダル獲得が7つも。しかも全種目に入賞の偉業。日本選手団MVPに値して当然」と手放して褒めた。

嘉成さんの旧姓は今岡と聞くと、オールドファンなら「ああ、あの」とマスターズ以前に活躍していた頃を思い出すかもしれない。岡山県の天城(現・倉敷天城)高時代は中国地方で存在感を示す程度の実力だったが、投てき王国を誇る日大へ進んで以後、頭角を現した。

1年時からインカレで活躍し、4年生になった1965年には砲丸投14m71、円盤投47m46で日本ランク1位を占めている。住友金属入社1年目の全日本実業団選手権では砲丸投で優勝した。

時は流れて1980年、マスターズが始まった第1回全日本中高齢者選手権のサークルに姿を見せたのだ。そのときは39歳で、35～39歳までの1A(現・W35)では不利な年齢だったが、砲丸投12m07でトップ。円盤投は30m96の2位だった。

昔取った杵柄の選手として注目されたが、第2回大会以後、ぱったりと姿を見せなくなった。次に姿を現したのは、1997年の第18回大分大会だ。この間の17年間は「子育てに追われていた」という。年齢は56歳、W55クラスに再登場した嘉成さんは、砲丸投11m08の日本新で17年ぶりに2回目の優勝を遂げたのだ。

それまでのW55・砲丸投の日本記録は10m98。大分大会は風雨の影響で大会日程を短縮、円盤投は実施できなかった。だが嘉成さんは大分大会前にあった福島マスターズの円盤投で28m88を投げ、27m42の日本記録を更新している。

先述の第22回バース大会を含め、世界大会の出場は9回。アジア・マスターズも同じで、全日本マスターズには23回の出場だ。メダル数は3大会合わせて33個。

印象に残るのは「世界マスターズで初めて金メダルを取れた2011年アメリカ・サクラメント大会」と話す。70歳でW70クラスの5種目に出た嘉成さんは、円盤投で金メダルを獲得した。28m63の日本新での快挙だった。

投てきの女王、嘉成俱子さん。来年度はW80クラスで世界新を目指す



旧日本記録は1952年ヘルシンキ五輪の円盤投で4位入賞した実力者・吉野トヨ子さんが70歳で出していた25m80(1990年)。実に21年ぶりの更新だった。

円盤投のほか、砲丸投9m47の日本新で2位。ハンマー投24m20でこちらも日本新の5位。重量投10m73で5位、投てき五種3679で4位、いずれも日本新と、5種目で日本新を打ち立てた。ちなみに従来の日本記録は砲丸投8m83、ハンマー投21m82、重量投8m69、投てき五種3099。

世界大会のほかの試合で砲丸投9m66、ハンマー投25m91、投てき五種4094の日本新を出している。クラス別日本(最高のみ記載)記録は別表どおりだが、今後の目標について「2021年にW80クラスになりますが、世界記録に挑戦してみたい。夢で終わるかもしれませんが」と笑いながら語った。

●嘉成俱子さんのクラス別日本記録

クラス	種目	記録
W35	砲丸投	12m07 (39歳・1980年)
	砲丸投	11m34 (57歳・1998年)
W55	円盤投	31m54 (59歳・2000年)
	砲丸投	11m07 (61歳・2002年)
W60	重量投	12m84 (62歳・2003年)
	砲丸投	10m63 (65歳・2006年)
	円盤投	29m42 (67歳・2008年)
W65	重量投	12m85 (65歳・2006年)
	砲丸投	9m77 (72歳・2013年)
	円盤投	28m63 (70歳・2011年)
W70	重量投	10m73 (70歳・2011年)
	投てき五種	4094 (70歳・2011年) (25m91-9m60-24m93-19m49-10m64)
	砲丸投	10m43 (75歳・2016年)
W75	円盤投	26m85 (76歳・2017年)
	重量投	10m73 (75歳・2016年)
	投てき五種	4380 (75歳・2016年) (26m64-9m97-26m23-16m13-10m41)

投てき五種の種目投てき順はハンマー投、砲丸投、円盤投、やり投、重量投